

1年1組

 冒険しよう！発見しよう！
 ～ドキドキ・ワクワク・ハラハラ～


「やっぱりジャンプするんだよ」

一月中旬、どかっと雪が降りました。一か月ぶりの積雪に子どもたちは、「待ってました！」というように自然体験園に駆け出していきました。広大な自然体験園では、遊びたい放題に雪と戯れることができます。雪遊びといえば、雪合戦。男の子も女の子もふかふかの雪を投げ合っていました。それから、ソリ滑り。岩山のあたりに小さな山があり、そこを何度も滑っていました。他にも、浜辺で体に砂を乗せるように、全身を雪のお布団で覆われている子もいました。雪を乗せている I さんは「筋肉モリモリみたいだよ」「なんだか、レンガをつくっているときみたい」と言いながら、H さんの腕に雪を乗せてはギュッと固めていました。H さんは、「一日こうしていたいな」と気持ちよさそうでした。H さんが起き上がると、一気に筋肉マッチョな雪のお布団はパラパラとなってしまいました。

O さんたち男の子三人は、小さな雪の山をつくり、そこを目掛けて雪玉を投げました。そして、「やっぱりジャンプするんだよ」とつぶやきます。山の側面に雪が当たるとその弾みで高く跳ね上がります。ちょうどよいところに当てなくてはうまくジャンプができません。原理としてはスキージャンプのようだなと思って私は見ていました。O さんが「やっぱり」と言っていたので、ジャンプするだろうという予想をしていたのではないかと思いました。彼らがその遊びをやりながら話していたことは、『跳び箱』でした。「ぼく、八段、跳べるんだよ」「学校で跳び箱やらないのかな」という会話が聞こえてきました。雪玉を投げながら跳び箱の話をする子どもを初めて見たような気がします。雪玉がジャンプする様子と自分が跳び箱を跳んでいる感覚が重なっているように感じました。雪原の中で、自分の体と心と頭を使って遊びを生み出し変化させ、イメージを広げることは、まさに「遊びは学び」であることを物語っていました。



「糸車はキーカラカラだけど、かなづちはなんだろう」

『レンガでつくるみんなのべっそう2023』第一の挑戦は、『レンガを焼く』ということです。「レンガを焼いてみないか」と私から子ども達に提案しました。理由はいくつかあります。その一つは、以前に大学へ赤煉瓦館を見学した後、T さんや R さんから「僕たちもレンガを焼いてみたい」という声があったこと。二つ目に、『子どもがつづる学習の記録』の原稿に書いてあった「私も赤煉瓦館みたいにつくってみたいな」という思いを目にしたこと。三つ目に6年2組さんが中核活動で取り組んでいる焼き物や自家製釉薬の美しさに惹かれたことがあります。子ども達からも「焼いてみたい!」という声上がり、二月中に一人8個の焼く用のレンガをつくるという目標を立てました。

これまでは、レンガをつくる人、ホイップ(どべ)をつくる人、組み立てる人など役割分担をしていましたが、今回は全員がレンガをつくれます。そのために、自分用の『my 木枠』をつくりました。金槌を使ってトントン釘打ちをしてつくります。以前にも屋根づくりで釘打ちをしましたが、そう簡単なことではありません。気をつけながら優しく打つので、釘がなかなか入っていきません。打っていくと釘が曲がっていきます。そういう時こそ友の存在が大切です。Uさんが困っていると、Rさんが「大丈夫だ



よ」と声をかけたり、「こうやるといいよ」と手を差し伸べたりして、最後まで見届けます。Uさんもだんだん慣れてきて、一人で釘を打ち込むことができました。

その後、Rさんが釘を打ちながら「糸車はキーカラカラだけど、かなづちはなんだろう」と、つぶやきます。少し間をおいて、「トントントントントンじゃない？」とUさんが答えます。このトントントンが文では言い表すのが難しいのですが、音階があるのです。それがとっても素敵でした。

RさんとUさんのかかわりを振り返りながら、先ほどの雪遊びをしながら跳び箱の話をしていたOさん達を思い出します。RさんとUさんも釘打ちをしながら、国語の『たぬきの糸車』を思い出し、聞こえたり感じたりする釘の音から音色を生み出します。体験や経験がそれぞれ単体のものではなく、つながり広がっていきます。これは小学校でみんなと学ぶことの意味(大切なところ)なのかもしれないと思いました。

「このくらいって、どのくらい？」

レンガをつくる際、土に対してどのくらいの水の量を入れるかがすごく大切です。水が多すぎると、べちゃっとなり、型からうまく抜けなかったり抜いても形が崩れたりしてしまいます。逆に水が少なすぎるとポロポロと崩れてしまいます。ちょうどよい量はどのくらいなのかを、毎回のレンガづくりで探究しています。「このくらい」の「このくらい」は子どもによって違います。その日の土の状態や気候によって微調整しています。子どもたちは、触らなくても見ただけで「このくらいでいい」と判断できるようになってきました。

容器に土を入れた後、水を入れる際、ちょっとした楽しみがあります。それは、音です。土に水を注ぐとシュワーっという音がします。これは、なんの音でしょう。炭酸のようだけれどパチパチはしません。土の隙間に水が入り、土に水が浸透していく時の音なのか、空気が押し出される音なのか定かではありません。

よく捏ねた粘土を型に入れる前にハンバーグのように丸くします。レンガの土づくりはお料理によく似ています。思わず「これっくらいの、お弁当箱に、おにぎりおにぎりちよいっとつめて・・・」と歌いたくなります。「おにぎりの次はハンバーグ、その次はトマト」と話しながら詰めていくと、本当のお弁当のようです。最後に1組でつくったレンガの歌「ぎゅうぎゅうペタペタぎゅうペタ、よくで一きた」と歌いながら仕上げていきます。昔、農作業からその土地その土地の歌が生まれたと聞いたことがあります。なんだか歌が生まれることや歌を口ずさみたくなる気持ちがわかります。レンガづくりをしていると、いろんなおしゃべりや歌が聞こえてきます。心も体も開放しながら友達と一緒に作る時間が豊かな時間であると感じます。

